

ラオス・ルアンパバーンのベトナム人

——度重なる政変下におけるミクロ・リージョンの創出と維持

比留間洋一

はじめに

本稿は、おもに現地調査^{*1}から得られた資料に基づき、ラオス・ルアンパバーンという小さな町に、二〇世紀初頭以降、何千人かのベトナム人が移住し、コミュニティを形成し、激動のインドシナ現代史を潜り抜けてきた——その経験の一端を明らかにするものである。

ベトナムとラオスでは、一九世紀後半以降のフランス領インドシナ、その後のアメリカの介入から独立していく過程で共産党が主導的な役割を果たし、共産党政権下の両国

の関係は、「兄弟」や「特別な関係」という言葉で形容されてきた。^{*2}従来のベトナム—ラオス地域は、このような国家主導のマクロ・リージョンの枠組みで説明されることが多かった。が、筆者はルアンパバーンのベトナム人に関する調査を行うことにより、このような枠組みでは多くのことが見落とされてしまうことを知った。たとえば、従来のベトナム研究によれば、ラオス在住のベトナム人は抗仏、抗米に多大な貢献をした愛国者たちとして描かれ、評価されることが多かった。^{*3}その歴史観の中心地となるのはエンチャン、タケクであって、ここでは本稿の対象となるルアンパバーンはほとんど言及されない（Tran Dinh Luu 2004: 102-106）。ほかにたとえば、フランス植民地期、

ラオス各省にベトナム人の小学校がひとつずつあったことは、(中学がラオス全体にひとつしかなかったことと併せて)ひとつずつしかなかったと否定的に表現され、フランスの「愚民政策」の表れとして断罪されている (Tran Dinh Luu 2004: 104)。しかし筆者の調査ではルアンパバーンのベトナム人たちはベトナム小学校を「誇り」と思っていることがわかったことがある。そのため、従来の国家主導のマクロ・リージョンから、ベトナム系移民たちがラオ社会との間につくりあげてきたミクロ・リージョンへ視点を移すことにより、移民の側から細部を見直す必要があるのではないか。これが、本稿の問題意識である。

そうすることにより、当該地域の実像を具体的に解明するうえで重要な、次のような諸点が視野に入ってくる。なぜベトナム人の墓、寺、小学校があるのか。フランス領時代にラオス、カンボジアへ移民したベトナム人には従来、官吏・商人・クーリーが多いとされてきたが、その内訳やグループ間の関係はどうなっていたのか。一九七五年の共產化以降、ベトナム、中国の商人がラオスでも難民化したということが知られているが、実際はどの程度の割合の人々が脱出したのか、またそれ以外の度重なる政変のなかをどのように潜り抜けてきたのか。同じ外来の商人としてベトナム人と中国人の間関係はどのようなものであったのか。ラオスとベトナムの「特別な関係」という二国間関

係は、移民たちにどのような影響を及ぼしているのか。グローバルゼーション下の暮らしぶりはどうなものか。

以上を改めて要約すると、本事例の第一の特徴は、ベトナム―ラオスの二国間の歴史的関係が色濃く反映されている点にあり、第二の特徴は、ベトナム系移民が墓・寺・小学校を建てることで移住先に新しい諸環境を物理的に構築し、ラオ社会との間に共存を図っていった点にある、ということになる。このような意味で、ラオス・ルアンパバーンのベトナム人の経験は、あえて一言で表現するならば、度重なる政変の下におけるミクロ・リージョンの創出と維持、と呼ぶことができる。このことを以下では、二国間の歴史的関係を縦軸、ベトナム系移民にとって重要な文化空間を横軸として、論述していく。

I ベトナム―ラオスの歴史的関係

1 フランス以前のインドシナ

現在のラオスの主要民族であるラオはタイ系民族であり、一三世紀頃、インドシナ半島に南下し、モン・クメール系民族に代わり台頭してきた勢力である。その後、ルアンパバーンの地は、ラーンサーン王国の中心となり、一六

世紀に上座部仏教、一七世紀には国際交易の拠点のひとつとなった。文化空間としてのルアンパバーンの特徴は、一九九五年に登録された世界遺産の内容が示しているように、第一に八〇余りともいわれる、煌びやかな仏教寺院が多数集中していること、第二に二〇世紀初頭頃のフランス植民地時代の瀟洒な建物が目抜き通りに立ち並んでいることが創り出す文化的景観であり、町全体が保存対象となっている点にある。つまり、外来者はその建造物群に目を見られることをここで強調しておきたい。

一方、今日のベトナムの主要民族であるベト族は、一〇世紀に中国から独立し、南シナ海沿岸を南下、一五世紀以降チャム族に代わり台頭してきた勢力である。一七世紀に、ルアンパバーンの地に、Wat Keo (Keoはベトナム人の俗称) という寺が存在したとされる (Heywood 2006)。その寺は、今日でもベトナム寺として知られている。あるいは国際交易に携わったベトナム人たちのことかもしれないが未詳である。またフランス植民地以前に、ラーンサーン王国とベトナム王朝との間では外交関係があった。

しかし、ベトナム人たちにとって、西にそびえるアンナン山脈(ヒマラヤ山系に端を発し、今日のベトナムーラオス、ベトナムーカンボジア国境付近を南北に縦走する。別名チュオンソン山脈)の壁は厚く、アンナン山脈以西に移動することは容易ではなかった (Ivarsson 2008: 101)。その

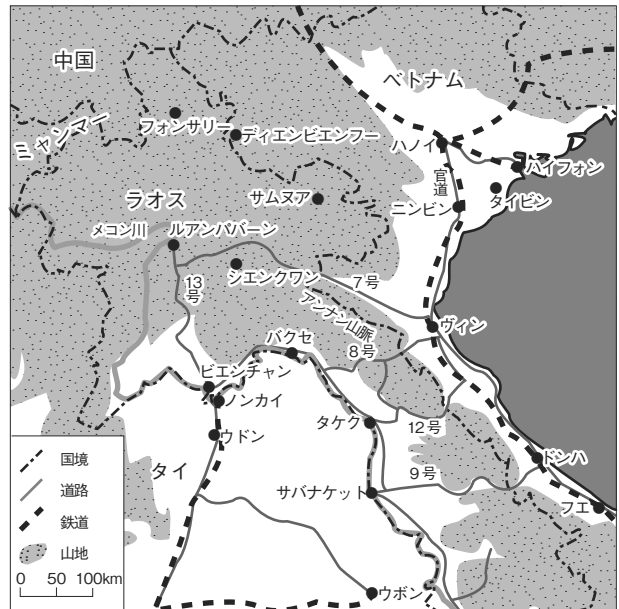


図1 植民地期北部ベトナムーラオスのインフラストラクチャー

(注) Ivarsson (2008) より作成。

壁を打ち破ったのが、フランス植民地が整備したインフラであった(図1)。

2 インドシナ・ネットワークの形成

一九世紀末以降、一九三〇年頃までの間に、インドシナ

の主要都市が鉄道、道路によりつながった。これをインドシナ・ネットワークと呼ぶ。それには、今日のベトナムの主要都市（ハノイ、ヴィン、フエ、サイゴンなど）、今日のラオスの主要都市（ルアンパバーン、ビエンチャン、タケク、サヴァナケット、パクセなど）および、今日のタイの主要都市（ノンカイ、ウドン、コーラート、ウボン、バンコクなど）が含まれる（Ivarsson 2008: 99）。このインドシナ・ネットワークは、現代を含めて、ベトナム系の人々の移動にとつて大きな意味があったと筆者は考えている。フランス植民地時代には、ベトナムからラオスへの移住ルートとなったほか、たとえば、後の時代に共産化を嫌った難民たちは、ルアンパバーンからビエンチャン、ビエンチャンからメコン川を渡って東北タイのノンカイ、ウドンへいたる陸路を辿った。そして現在も東北タイに大勢居住するベトナム人たちがバンコクとの間を往来している。

さて本稿で扱う、ベトナム北部からルアンパバーンに連絡する幹線道路の整備は、一九三六年頃までには完成していたことが文献から窺える。^{*4} 筆者の調査（表1参照）でも、北部ベトナム、すなわちフランス植民地時代の行政枠組でいう「トンキン」出身者がほとんどで（ニンビン四四・九%、タイビン二六・一%など）、ちょうどフランスのつくった道路を通り、東から西へと水平に移住したような印象を受ける。

表 1 墓碑に記載された出身省

省名	人数	割合
ニンビン	53	44.9%
タイビン	19	16.1%
ハナムニン	11	9.3%
ナムディン	8	6.7%
ゲアン	5	4.2%
ハナム	5	4.2%
ハドン	4	3.3%
ハティン	4	3.3%
ランソン	2	1.6%
フンイエ	2	1.6%
ハイズオン	1	0.8%
ゲティン	1	0.8%
ホーチミン市	1	0.8%
フエ市	1	0.8%
不明	1	0.8%
計	118	

(注) 239 基中 118 基に省名の記載があった。

3 移民の故郷

当時のトンキンはどのような地域としてみなされていたのだろうか。

フランス植民地当時のさまざまなフランス語文献に共通するのは、フランス領インドシナのなかで、トンキンおよびアンナン（ベトナム中部）は、第一に、あまりに人口稠密なため社会的政治的に不安定となつていくという見方、第二に、同地域の人々は、それ以外の地域の人々（コーチシナ、ラオス、カンボジア、少数民族）に比べて、勤勉かつ優秀である、という見方である。そしてこのような見方をもとに、ラオス、カンボジア、コーチシナ（ベトナム南

部)あるいは太平洋各地のフランス植民地の島々(タヒチ、ニュー・カレドニア、ニュー・ヘブリッド諸島など)は開発が遅れており、勤勉かつ優秀な人手が乏しいので、ベトナムの北部中部からの移住が推奨されていた。移住の最盛期に相当する一九三六年に、ベトナム北部のトンキンの人口の稠密性を実証したとされる、有名なグールーの人文地理学的研究が刊行されている(グールー 1946)。

もちろんトンキンが相対的に貧困層の多い地域であったことを筆者は否定しているのではない。たとえば、在ルアンパバーン・ベトナム人の最多出身地イエンモに関しては次の資料がある。それは、「一九四五年飢饉」に関する日越共同調査の報告書(ベトナム語)で、同書中ニンビン省での調査対象村が、イエンモ県に属する一村である(Vu Tao va Furuta Moto 1995)。同書からは、総じてニンビンには貧困層が多かったことが窺える。また同村では「ラオスに出稼ぎに行っていた」旨、備考に記されている事例が二世帯(総数一〇六世帯)あり、二世帯とも家族全員とも生き残っていることが注意を引く。ただし、同書中で調査対象地域となっている他省の村についても、ほぼ同じくらの餓死率が示されており、イエンモだけが特別に貧困であったとはいえない。

いずれにせよ、おそらくひとつにはこのような背景(移住を推進する動き)があり、ある時期までは、同じフラン

ス領インドシナの保護領という枠組にあったトンキン(北部ベトナム)とラオスの間では、国境の制度も緩やかであった。筆者の調査では、Cさん(一九五〇年生、女性)から次の証言を得た(括弧内は筆者注)。

「(うちの家族が)ここに来て、六〇年以上(一九四七年以前)になる。そう、私の父がまさに、イエンモ出身。歩いて一―二カ月かけてここまで来た。一度目に来た後、いったん帰って、二度目に一団をつれてきた。ベトナムには、本妻と二人の息子がいた。もう一度戻ろうとしたら、国境の制度が変わって、帰ることが許されなくなった。ここで私の母を娶って、私が生まれた。」

4 移住先ルアンパバーン

このように同じようにラオスと国境を接している、中国よりも、ベトナム人の方が、ラオスへの移住が容易であった(Evans 2002: 70)。一九四三年のルアンパバーンの人口は四九五〇人で、民族別ではラオ人が三千人(六一%)、次に多いベトナム人が一四〇〇人(二八%)、中国人が四八〇人(一〇%)、その他七〇人(二%)であった(Evans 2002: 71)。しかも、このルアンパバーンのベトナム人比率(二八%)はラオスの他の主要都市(ビエンチャン、タ

ケク、サヴァナケット、パクセ、シエンクアン）のなかでは例外的に少なかった。他ではベトナム人口が人口の半数以上を占めていた。

なぜルアンパバーンは特殊なのであろうか。ひとつには、ラオスがフランス植民地から独立する過程で重要な役割を担った、ルアンパバーン王国首相のペッサラートの意向とおそらく関係がある。ペッサラートは、「ラオスはルアンパバーン王国のもと、ひとつの政体として実在し、統一されるべきである」と考えていた (Ivarsson 2008: 107)。ペッサラートは一九三一年に、「ベトナム人移民に全面的に反対というわけではないが、移民が国家の内部に国家を形成すべきではなく、移民は管理され、ラオスの現行の法律と制度に従わねばならない」ことを強調したとされる (Ivarsson 2008: 107)。

5 現在のルアンパバーン在住ベトナム人にとっての故郷

現在のこの地のベトナム人たちは故郷をどのように見ているのだろうか。筆者の全体的な印象では、ルーツがベトナム人というアイデンティティははっきり有しており、一世なら一度は故郷に帰ってみたい、二世なら一度は故郷というものを見てみたいという気持ちは強いが、頻繁に定

期的に訪ねるといふようなことは少ない。個別の事情を二、三見てみたい。

たとえば、数年前から道端でベトナムのお粥などを売っているルアンパバーン生まれの二世の中年女性は、一度北部の故郷を訪れ、そのついでに南部にも旅行に行ってきたと話した。夫もベトナム人だが、子どもたちはベトナム語がほとんどできないという。

たとえば、一九六二年ルアンパバーン生まれの二世のベトナム寺住職は、ある高齢女性によれば、姉とともに幼くして父母に生き別れ、これまで寺の用事で七回ベトナムに行き、そのたびに親についての手がかりを捜し求めたが未詳で、故郷もシンセキもわからずじまいだという。また同じくルアンパバーン生まれの二世のCさんの場合、父の故郷には父が残してきた先妻とその子どもが暮らしている。故郷を訪れたことはない。Cさんが後妻の子どもであるため躊躇われるのかもしれない。

Ⅱ 移民による生活空間の構築過程

上述したような二国間の歴史的関係のもと、ルアンパバーンに移り住んだベトナム系移民がどのように生活空間を構築し、現地との間にどのように共存を築いていったか

をみていきたい。ルアンパバーンのベトナム人領事によれば、寺・小学校・共同墓地の三つはベトナム人社会の財産であり、老人たちが今も誇りに思っているものであるという。重要な点は、寺・小学校・共同墓地という物理的な建造物の建築にこだわりがみられること、およびこの三施設がルアンパバーンという土地の文脈では、他民族との共存のための手立てとしての役回りを果たしてきた側面が認められることである。

1 ベトナム村の寺と小学校

「アンナン村ともベトナム村とも呼ばれていた」（Cさんの話）ベトナム人集住地区は、ルアンパバーンの町の中心街から少し離れた場所（徒歩で四〇分ほど）に形成された。道の両側にベトナム人の家が列を成していたとされる。しかし現在残っているのは、ベトナム小学校、ベトナム寺くらいである。

ベトナム寺の正式名称は「仏足跡寺」という。住職の話では、この寺の由来は、ベトナム僧侶がベトナム人のための寺を建てる場所を探していたところ、もとラオ人が建てたが古くて朽ち果てていた無住のこの寺に出会い、ラオス政権に使用許可を申請し認められ、再興したという。寺の様式は、上座部仏教のラオ的要素と混淆しているが、随



写真 1 ルアンパバーンのベトナム寺

所にベトナム的要素がみられる。ひととき目立つ仏像は、裏手にある巨大な涅槃像であり、現在、観光客用ガイドブックにも紹介されている。どのような仏像を寄進するかは寄進者によるという。きわめてベトナム風の「祖堂」（歴代住職を祀る祭壇などがある）の壁の仏画（二〇点ほど）には一点一点、寄進者の名前がベトナム語で記されている。メコン河に面した場所にラオ式の仏足跡のモニュメントと、「城皇」という漢字の書かれた小祠がある。城皇はベトナムでは村の守護神であり祠所（^{デイン}亭と呼ばれる）は集会

所となっている。(小祠の建立年は未詳だが) この寺の地がベトナム人の結節点としての性格を有することを推察させる。

住職によれば、「解放」(一九七五年……筆者注)前は、越僑(在外ベトナム人)仏教会があったが解放後になくなった。昔の仏教会には接礼班、念仏班などいろいろな小班があった。Cさんの話では、一九七二年に父が亡くなったときは改葬(埋葬から数年後、掘り返して洗骨し骨壺に納めて埋め直す。北部ベトナムでは今も一般に行われている)を



写真2 雄王小学校。古樹は70年の歴史を有する証

行ったという。しかし、九〇年の母、九六年の妹の場合は改葬を行わなかった。八〇年代から行われなくなったというから、やはり七五年から八〇年にかけて変化が起こっている。

門柱には、漢字に似せたベトナム語で次の対聯が刻まれている。「仏地は人の有福の爲にこそある」「聖地は誰かの爲だけにあるのではない」。現在、寺のあるバーン(村)の住人はラオ人ばかりである。二家族のベトナム系家族もいるが普段はラオの名前でラオ人として暮らしているという。現地生まれの二世の住職は、現在、バーンのラオ人住人のためにはラオ語で読経を行い、町全体で一〇〇家族いるベトナム系の人々のためにはベトナム語で読経を行っているという。

小学校の正式名称は「ルアンパバーン雄王小学校」という。雄王とは、ベトナムの建国神話に登場する有名な王の名前である。建物は、大きな瓦屋根に白壁の背の高い平屋で、ベトナム村落の立派な亭のような存在感がある。建物の右手の菩提樹の巨木は、小学校建設時に植えられたもので、樹齢七〇年以上だという。数年前からこの校内で、ベトナムの高齢者そのままの服装で駄菓子屋を営んでいる女性、これまでたった二度塗装を行っただけでほとんど創建時のまま修理していないと嘆いた。しかし見方を変えればそれだけ堅牢な建造物だという証拠である。

ベトナム小学校は一九三〇年代の創建時、教育の質が高いとして威信のある学校であったという。ラオスでは現在でも、中国系の学校が質の高い教育が受けられるとしてラオ人エリートに人気があるという。おそらく、フランス時代のベトナム小学校も同様であったのではないか。ベトナム語も学べるこの小学校の存在はルアンパバーンのラオ人からある程度歓迎されたのではないかと*₅と思われる。

Cさんが雄王小学校に通っていたころ（一九五〇年代半ばから一九六〇年代）は、学校にベトナム人教師がいて、ベトナムの文字などを教えていた。他方ラオ文字は週に二時間だけ外国語として学んでいた、という。一方、現在では、ラオ人教師とラオ人生徒が通うラオの小学校になっている。

2 墓地と市場

もうひとつの「誇り」が共同墓地である（図1参照）。墓地は、市街地からは数キロ離れた山の斜面に位置する。一面ではおそらく風水上の適地である。広々とした敷地からはルアンパバーンのランドマークであり宗教的シンボルであるプーシー山が遠望できる。他面では経済的に利用価値の少ない場所である。フェンスの外側は山羊のいる林である。共同墓地には門があり、土地神を祀る廟がある。奥

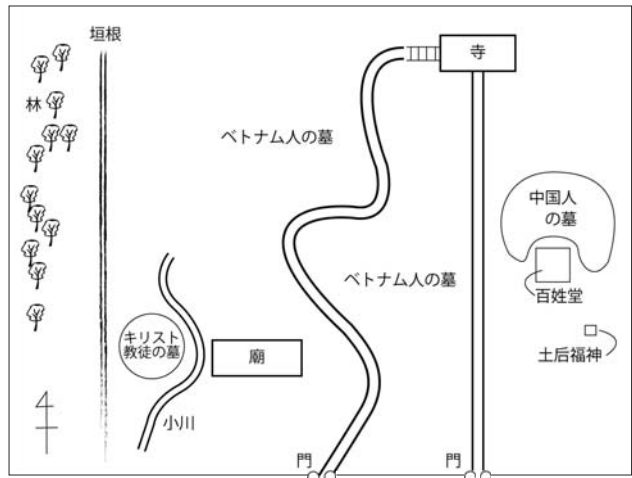


図2 ベトナム人共同墓地の模式図

の高みには拝所（一九六〇年建立）があり、ベトナム系の住職がいる。筆者の調査では、一九三七年から二〇〇七年までの間に建立された墓が二四〇基以上ある。立派な石を用いた大きな造りの墓も少なくない。十字架のあるキリスト教徒の墓も数十基ある。

墓地についても、住職、領事がともに現地政府の正式な

許可を得ていることを強調した。敷地内には、中国系の墓も一〇〇基ほどある。雲南省紅河県出身者が多い。ラオ人は土葬の習慣がないが、若干数、ラオ文字で書かれた墓もある。これらは、領事によれば、モン族（現在ルアンパバーンの市内にモン・マーケットがある）の墓だという。つまりベトナム人の墓碑はベトナム語で書かれている。

筆者は二三九基の墓碑データを収集した。その内容を少しくわしくみていきたい。表2は、墓地の記載項目別の件



写真3 共同墓地に墓参りをするCさん

表2 墓碑の記載項目別件数

項目	件数
フルネーム	223
出身地	131
死亡年月日（西暦）	125
生年のみ（西暦）	74
死亡年のみ（陰暦）	69
死亡年のみ（西暦）	58
亡くなった場所 （ルアンパバーン）	55
生年月日（西暦）	41
享年	36

数を示したものである。表からわかるように、名前（フルネーム）、出身地、死亡時、誕生時を記載する墓碑が多い。死亡時の場合、年のみではなく年月日を記載するケースが、誕生時よりも多い。毎年、命日の法事を執り行うベトナムの習慣によるものであろう。実際、ルアンパバーンのある女性も毎年法事を行っている、と筆者に話した。ベトナム北部村落の一般的な墓碑との違いは、出身地および、亡くなった場所として「在ルアンパバーン」という記載がみられる点である。ここに移民の墓であることが現れている。ただし、二三九基のうち、出身地をまったく記載していないものが一〇八基（全体の四五％）あることにも注目したい。

次の表3は、死亡年の記載のあった一四二基について、一〇年ごとの年代別に、出身地がどのように記載されているかを示したものである。「なし」は出身地の記載がない

表 3 墓碑の死亡年代別出身地記載状況

年代	行政単位	件数	割合
1930 年代	社・村	1	100.0%
	計	1	
1940 年代	なし	4	22.5%
	都市	1	11.1%
	社・村	4	22.5%
	計	9	
1950 年代	省	2	100.0%
	計	2	
1960 年代	なし	3	20.0%
	省	1	6.6%
	県	5	33.3%
	社・村	6	40.0%
	計	15	
1970 年代	なし	22	57.8%
	省	3	7.8%
	県	4	10.5%
	社・村	9	23.6%
	計	38	
1980 年代	なし	13	48.1%
	省	5	18.5%
	県	2	7.4%
	社・村	6	22.2%
	計	27	
1990 年代	なし	13	50.0%
	省	4	15.3%
	県	4	15.3%
	社・村	5	19.2%
	計	26	
2000 年代	なし	17	70.8%
	省	1	4.1%
	県	1	4.1%
	社・村	4	16.6%
	計	24	
総計		142	

こと、「省」「都市」は省名や都市名のみが記載されていること、「県」は県名まで、すなわち省名と県名が、「社・村」は社名または村名（行政単位ではないムラを含む）までが記載されていることを意味している。

ここから次の諸点が明らかである。まず最も顕著な傾向は、出身地の記載の無い墓碑の件数が一九七〇年代から増加し、割合をみると二〇〇〇年代には七割を占めていることである。省・都市のみの記載は常に限定的であるが、注意すべきことは、出身地の記載がある場合は、九割方、少なくとも省についての記載はみられることである。省+省以下の行政単位が記載されている場合、「県まで」は割合をみると変動が大きいが、件数をみると一件から五件と常に

限定的である。このような県名までの記載では、もし子孫が村・社の名前を記憶していない場合、故郷は特定できない可能性が高い。いっぽう社・村までの記載は件数でみると、県までの記載よりも多く常に一定数みられるが、顕著な差があるわけではなく、一桁に留まってはいる。なぜこのような傾向がみられるのかはまだ調査していないため未詳であるが、どこの省出身かという意識が強く、墓碑の上では故郷（むら）へのこだわりは弱い、ということができよう。他に目に留まった点では、死亡者数（厳密には死亡年記載数）の最も多い一九七〇年代に社・村までの記載が九件と最も多くなっている。一九七〇年代の死亡者を少しくわしくみてみると、六五歳以上の長寿者が多く一六人に

上る。この長寿者たちは一八八五年から一九〇六年の間に生まれ、その平均寿命は七六歳である。このように長寿者が多いことは、次の市場の話にあるように、ひとつには暮らしぶりがよかったことを窺わせる。

フランス時代にほとんどがベトナム人商人で占められていたというダラ市場[※]は、市内中心部に位置する。たとえば、Cさんの家では豚を殺した後、丸焼きにして売っていた。一家でがむしゃらに働いていたという。Cさんの話では、民族別に職業が分かれていた。ベトナム人はダラ市場などで商売に従事していた。中国人は、目抜き通り（サッカーリン通り）に店を構えて、衣服や食器を売っていた。以前（一九七五年）は、「中国人通り」と呼ばれていた。モン族は、畑でアヘンを作っていた。そして、ラオ人は、官吏として給料をもらっていた、という。当時のベトナム人は中国人と同様に裕福な人が多かった。ベトナム人と中国人は若者同士仲良く遊ぶことも多かったという。

Ⅲ 政変に伴う矛盾や葛藤のなかで

このように生活空間を築いていた「ベトナム村」の住人たちは、その後、第一次インドシナ戦争、第二次インドシナ戦争、共産政権の樹立、対外開放政策などの大きな政

変に伴って生じた葛藤や矛盾の結果、住民の人口は最盛期の三分の一にまで減少した。が、（中国人社会とは異なり）コミュニティは存続し続けた。

1 「ベトナム村」へのフランス軍の侵入

住職らの話では、「敵軍フランス」が、ベトナム村にもやってきて、ベトミン（ベトナム独立同盟）捜索を行った。このとき、ベトナム村に住む多くのベトナム人たちが離散した。この出来事はおそらく、一九四五年、六ヵ月に及んだ日本軍政下の時代が終わり、再侵略をもくろんだフランスが、ラオスにおいて反仏運動[※]を担っていたベトミンを一掃しよう[※]と各地のベトナム人社会を襲ったことを指しているのだろう。

いずれにせよ、このようにして、「ベトナム人村」と呼ばれたベトナム人集住地区は姿を消すことになった。その避難先で、最も多かったのが、マノ通り沿いであった。マノ通りは、ダラ市場からもすぐ近くに位置する。マノ通りの西には当時、キリスト教教会があり、フランス人神父がいたという。ベトナム人にもキリスト教徒は少なくなかったらしい。このようにして、マノ通り沿道の両側をベトナム人の家が軒を連ねるようになった。

2 共産化を恐れビエンチャン経由で東北タイへ

一九五四年（キリスト教徒が中心）と一九七五年に共産化を恐れたベトナム人が多数、ルアンパバーンを脱出、ビエンチャンを経由してメコン河を渡り、東北タイへと逃れた。ベトナム人ランドピールたちはそこからフランスなど第三国へ難民として渡っていった。Cさんの話では、「（ベトナム人のなかで）アメリカ側、フランス側で働いていた人は少しだけだった」という。必ずしもアメリカ、フランスの協力者ではない人々が大量難民になったのである。

一九七五年以降、社会主義化および経済状況の悪化のもと、それまで裕福な暮らしを送っていたベトナム人たちの暮らしは一変したようである。Cさんの家族では一九七五年末に末妹がフランスへ渡った。長女のCさんは老いた母親の世話をみるために残った。その後、Cさんは夫と離婚し、お粥を売って娘と母親の面倒をみた。このようにしてルアンパバーンのベトナム人人口は、二〇〇七年二月調査時点では、約一〇〇家族六〇〇人、最盛期（約一四〇〇人）の二分の一以下となり、往時にはマノ通りの端から端まで軒を連ねていたベトナム人住居は現在、約一軒へと減少した。

3 在ルアンパバーン・ベトナム人会^{*8}

現在、ベトナム人会の事務所は、マノ通り沿いのかつての教会（現在は警察署）の近くに所在している。この建物は一九七五年以前、あるベトナム人のものであったのを、解放後にラオス政府が接収。その後、ベトナム人会が申請して使用を許可されたという経緯がある、という。

在ルアンパバーン・ベトナム人会は、次のCさんの話から、一九六〇年代後半という戦争中にも集まりを開催していたことがわかる。「昔、私は歌がうまかった。八月十五日（中秋節……筆者注）など、ベトナム人会が開催した集まりで、何人か歌を歌った。観客から褒美としておひねりが渡されるのだが、終わった後で勘定したら、私が一番多かった」。また、一九七五年以前は、ベトナム北部同様に、老人会組織があり、ベトナム人会から長寿祝いの会や記念品贈呈を行っていたという。が、いずれも活動も現在は行われていない。現在の主な活動は、月に数回、事務所でミーティングを開き、ベトナム人会の活動について話し合っている。これには毎回二〇〜三〇人ほどが出席している。いっぽう寺の年三回の行事には、ほぼ一〇〇家族すべてが参加する。声をかければキリスト教徒の数家族さえ参加するのだという（住職の話）。他に、ベトナム人会では、

ベトナムの国慶節などに式典を開催している。青年団の活動もあり、週末にサッカーの練習をしている。雄王小学校の校長室には、ホーチミン主席の胸像とともに、ベトナム人支部からの贈呈品がいくつか飾られていた。

現在のベトナム系社会は、かつての一時的な繁栄から規模が小さくなり、かつ二世、三世の時代に移ったことにより、国籍、通名（普段の生活ではラオ人の名前で暮らしている）、信仰（Cさんの事例のなかでは托鉢と柱上祠など）、言語、婚姻（ラオ人との通婚）の上では、かなり現地化（ラオ化）が進んでいる。たとえば、大多数のベトナム人は小商売を行う上でラオス国籍を取得したほうが有利なのでベトナム国籍を抹消している、という。

そして、このような状況を憂慮する動きがある。ベトナム人支部会の会合に積極的に参加している一世の高齢女性の不満は、在ルアンパバーン・ベトナム人会の現代表に対するもので、その内容は、ベトナム本国政府に申請すれば、ベトナム語教員の派遣や、雄王小学校の改築費用の一部支給が得られる可能性がある、しかもわれわれ住人も拠金するといっているのに、いまのところ動こうとしない、というものであった。

4 領事館開設

二〇〇五年、マノ通りから自転車で数分離れた場所に、ベトナム領事館が開設された。このことは、ひとつには、ルアンパバーンとベトナム間の各種交流の拡大がより進んだ段階に入ったことを意味しているのだろう。領事が「新ベトナム人」と呼ぶ、ニューカマー（ベトナム南部からの移民で木工職人に従事）も三〇〇人ほど移住してきた。ニューカマーは本稿でみてきた人々とは別の場所に離れて住み、交流も少ないという。また、ラオスはベトナムとは相変わらず「特別な関係」を維持しているが、近年は隣国の中国やタイとも善隣外交を進めようとしている。領事として赴任してきたのは、それまでタイ、カンボジアで長年国境問題に従事してきた、いわばインドシナ地域の専門家である。ルアンパバーンには妻と二人で暮らしている。息子はフランスで修士号を取得し、ハノイ大学で観光開発を教えている。領事は、ルアンパバーンのベトナム人社会の歴史を振り返って、ベトナム―ラオス両国政府の「特別な関係」の役割を強調し、その具体例として二つをあげた。

ひとつめに、フランス領時代に、寺・小学校・墓地をつくることをラオス政府から公式に認められたことをあげた。一般に「特別な関係」は一九六〇年代以降のこととさ

れている。そこで、この領事の見解は、インドシナ共産党の成立（一九三〇年）などを適時的に含め、「特別な関係」を拡大解釈したものであるように捉えることができる。

二つめに、両国の国籍制度がゆるやかに規定されていることをあげた。たとえば、タイ、カンボジアのベトナム系移民が長年住み着いているのにベトナム国籍を保持しつづけることは難しいが、ラオスのベトナム系移民は可能である、と述べた。この点でも、在ラオスのベトナム人は、二国間の歴史的関係を反映して特殊性を有しているらしい。ベトナム国籍を抹消していないおもな理由は、商売の規模が小さいため、商売上多少の不利益はあるかもしれないが、それよりもベトナム国籍抹消手続きの煩雑さのほうが大きいと感じている人が多いことによるらしい。次に、ベトナム国籍を保持しているとはいえ、やはり現地との共存を図ってきた具体例としてCさんの場合を紹介する。

5 Cさんの場合

Cさんは筆者に対して、父親からベトナム国籍を抹消してはいけない、といわれたからだと説明した。Cさんとの出会いは、筆者がある女性に調査目的を告げると「それならC姉さんに会うといいよ」と紹介されたことによる。Cさんは領事館やベトナム人会支部で仕事を手伝っている。

また、墓地の廟の再建のためにベトナム人のバーコン（人々の意味。一般にコミュニティ内やシンセキなど知り合いに對して用いられる^{*}）に募金呼びかけを行ったりもしているというから、ベトナム人コミュニティの強化に熱心に関わっている一人ということが出来る。Cさんは普段ベトナム人の服装をし、ノン（ベトナムの菅笠）をかぶっている。

Cさん（一九五〇年生まれの子二世）は次のように話した。「私は結婚して息子と娘を産んだ後、離婚しました。息子は夫が引き取り、娘は私が引き取りました。夫と息子は、後妻と近くに住んでいます。息子は、育ての母を慕い、私を貴びません。私と娘の二人で、お粥を売って暮らしていました。生活は苦しかったです。私は男のことも全部やらねばならなかったのです。水汲みから、薪割り、包丁の刃を研ぐことまで。そうしてようやくこの家を建てたのです。」

その家では、ベトナム風に亡くなった父母、妹および仏、財神を祀る一方、戸外ではラオス風に土地の神様に托鉢後のモチ米をお供えている。

Cさんはイエンモからこの地に移住してきた自らの父の代から、自らの人生を振り返った後、次のように言った。「風が吹く方向に従ってきました。客地他郷に住んでいるのですから、生計をたてるのも、真面目に、正直にやってきました。」

Cさんの娘は二〇〇〇年にルアンパバーンを訪れた在フランスのベトナム人男性と結婚し、フランスに移り住んでいる。Cさんは娘の出産のたびに長くフランスに逗留し、三度目となる今回（二〇〇八年二月の予定）はこれまで以上にフランスに長く逗留する予定だと話した。

またCさんにはバンコク在住タイ人、京都在住日本人、ビエンチャン在住ラオ人の養子がいる。三人とも、ちょうどCさんの息子くらいの年齢でルアンパバーンでCさんと知り合っている。このように、氣に入った人との間に擬制的血縁関係を結ぼうとする傾向は、北部ベトナムに特有の文化実践といえることができる。いずれにせよ、Cさんの信仰や「風」という比喩、擬制親子などにも、激動のインドシナ近現代史のなかで自分の世界を創り出して現地の定着者との間に共存を図ってきた移住者の生きざまを読み取ることができよう。

おわりに

冒頭に示した問題意識は次のようなものであった。ベトナム・ラオスの「特別な関係」を強調する国家主導のマクロ・リージョンから、ルアンパバーンに移住してきたベトナム系移民が定着民ラオス人との間につくりあげてきたミ

クロ・リージョンへと視点を移すこと。それにより描出された地域像を概観すると、以下の通りとなる。

ルアンパバーンへのベトナム人の集団的な移住の背景には、第一に、インドシナ・ネットワークの形成があった。フランス植民地期に入ると、フランスが整備したインフラにより、インドシナの主要都市間がむすばれた。それにより、従来ベトナム人の壁となっていたアンナン山脈の西への移住が容易となった。第二に、移民の故郷トンキン（北部ベトナム）は人口稠密で、ラオス、カンボジア、コーチシナなどへ開発を目的とした移住が推進されてきた。住民の民族別割合でベトナム人が最も多かったであったビエンチャンやタケクなど他のラオス主要都市に比べ、一九四〇年代のルアンパバーンは、ラオ人人口のほうがベトナム人より多かった。ベトナム人のこの地への移入や活動は他の都市に比べ管理統制された可能性がある。そして現在のベトナム系移民たちはベトナム人という民族的なアイデンティティは明確にもちながらも、故郷への憧憬はさほど強いものではないようである。

以上のような特徴を有するルアンパバーンのベトナム系移民がどのようにに生活環境を構築していったか。ベトナム村またアンナン村とよばれたベトナム人集住地区（市街地内の外れ）には小学校と寺が建てられた。墓地は市街地の郊外に設けられ、同じ敷地内に中国人墓地が併設されてい

る。二三九基の墓碑を収集した筆者の調査により、詳細な出身地や長寿の傾向などが判明した。この地のベトナム人は大部分が商人で、市街地中心部のダラ市場で商売をし、中国人同様かなり繁盛していた。さらに重要なことは、小学校・寺・墓地が質の高い立派なもので、定着民の利用にも開かれており、定着民との共生に一役買ってきた側面があることである。

最後に、政変に伴う矛盾や葛藤のなかでどのように自分たちの世界を維持してきたかに注目した。ベトナム人人口が激減した契機は二・三度あった。一度目は、一九四五年以降、再侵略をもくろんだフランス軍が侵入したときで、ベトナム人村が解体した。次の契機は一九五四年と一九七五年以降に共産化を恐れた人々が脱出したときであった。これらの結果、ベトナム人人口は約一四〇〇人を数えた往時に比べると二分の一以下にまで減少し、現在は約一〇〇軒六〇〇人となった。現在、寺の行事にはキリスト教徒を含めほぼ全世帯のベトナム人が参加し、寺がコミュニティの結節点となっているようである。ただ寺以外にも、伝統のあるベトナム人会支部、新設された領事館、グローバル化に伴って往来する人などの諸アクターがさまざまな影響を及ぼしている。Cさんの事例は、このような地域史を生き抜いてきた典型的な移民の姿と位置づけられる。

ミクロ・リージョン自体の議論の上では、本稿の意義は、第一に、移住者は移住先で自分たちの世界を創り出し、共存を図る、という実態がミクロ・リージョンの創出そのものということができること、第二に、ベトナム系移民の場合、その創出に当たって、墓・寺・小学校が重要な意味をもつことを示唆していることであろう。^{*10} このことがどの程度、一般的にいえることなのか、またベトナム・ラオスの二国間関係にどの程度規定されたことなのかは今後の課題である。その手がかりのひとつは、ラオスの各都市におそらくみられる、本事例と似たようなベトナム人のミクロ・リージョンの創出・維持を検証することである。また、ベトナム人同様にかつてみられたラオス在住華僑の世界は、とくにポルポト時代のインドシナ半島情勢（ベトナム、ラオスのソ連陣営と中国陣営のカンボジアの二つに分断）の結果ほぼ消滅してしまったようであり、二国間関係による影響については華僑との比較が手がかりとなるであろう。

●注

*1 調査は短期間（二〇〇七年一月の一週間程度）の予備的なものである。通訳を介さずベトナム語で実施した。短期間ながら、今回の調査では、ルアンパバーンのベトナム人社会の大よその姿は、かなり把握できたと考えている。その大きな理由は、ルアンパバーン自体の町の規模が小さいことに

拠る。ベトナム人関連の主要な施設や場所（主要なもの、寺、小学校、墓地、マノ通り、領事館）を訪れ、関係者に話を聞くことができた。とくに、イエンモ出身の父をもち、ベトナム人会事務所、領事館での仕事をしている、Cさんから数時間じっくり話を聞いたこと、および墓地にてかなり網羅的に墓碑を収集できたことが大きかった。ただしベトナム人会代表から話を聞くことができなかった。ベトナム人会事務所には何らかの基礎データや文書資料が存在する可能性がある。今後の調査の課題としたい。

*2 ベトナム人の研究では、「この概念を最初に使用したのはホーチミン主席であり」、一九五九年五月から六月頃に出現した、とある（Tran Xuan Cau-Kongxayxana 1993: 288-290）。

一般には、ベトナムーラオスの「特別な関係」は、一九六〇年代の第二次インドシナ戦争時代に、両国の共産党が規定しあった外交上の同盟関係であるといわれている。一九七五年戦争終結後も、ベトナムがラオスの国家建設に対して資金提供、技術者派遣などの協力を行ってきた。「特別な関係」を最も象徴する出来事として、一九七九年の中越戦争の際にラオスがベトナムを支持したことがしばしば挙げられる。現在も、「特別な関係」の維持は両国政府の間で確認されており、在ラオス日本大使館の公式ホームページにおける「ラオスの外交政策」にも、ベトナムは唯一「特別な関係」を有する最重要国として位置づけられている。

*3 たとえば、古田（1991）、白石（1993）。「ベトナムの独立運動は、こうしたフランスおよび周辺地域に在住するベトナム人間のネットワークを駆使した形で組織化された」（古

屋 2009: 48）。ベトナム人による代表的な研究に（Tran Dinh Luu 2004）などがある。

*4 一九三六年に執筆された文献「満鉄東亜経済調査局 1941: 365」に拠る。同書によれば、たとえば、ベトナムの海岸フーディエンの町から「ルアンパバーンに連絡するを目的とする」七号道路、ハノイからサムヌアを経由しルアンパバーンに連絡する第六号道路などがある。

*5 一九三〇年代のビエンチャンについて次のような記述もある。「越僑の人々とラオスの人民との間の関係は大変密接で、ラオとベトの生徒は同じ学校で学んでいたので社会関係やその他の活動において大変濃密につながっていた」（Tran Dinh Luu 2004: 104）。

*6 創建は未詳だが、ひとつの手がかりは、一九四〇年にルアンパバーンを訪れた日本人の地図（中村 1994）に「新市場」と記されている。

*7 Cさんは日本軍はルアンパバーンのベトナム人女性を陵辱した、と筆者に話した。

*8 時間的制約から在ルアンパバーン・ベトナム人会の現代表に会うことができなかったため、本稿の情報はすべて通常の会員からの聞き取りに基づく。

*9 この地のベトナム人がベトナム人コミュニティの人々のことを指すのに、このベトナム語表現を用いることは、コミュニティ意識を有していることを示唆している。

*10 インドシナのベトナム人の経験は、他の国のベトナム系移民に比べ、フランス植民地時代以来の移民という点で相対的に長い歴史を有しており、ベトナム系移民研究の先行事例

としての意義を有する。しかし、その人類学的調査研究はほとんど行われていない。ちなみに、一九七五年以前の在外ベトナム人は一〇カ国以上に約一六万人強のみが居住し、多い順にタイ五万人、カンボジア四万人、ラオス三万人、フランス三万人、中国七千人などであった。これに対して大量の難民が発生した一九七五年以後は七〇カ国以上に二〇〇万人以上が居住するようになった、とある (Nguyen Ngoc Ha 1990: 14)。本事例で示した、国境を越えたベトナム人の国際的なネットワーク、ベトナム人同士で集住し市場で商業活動に従事し寺や小学校(ないしその萌芽的なもの)をもつという文化実践のあり方は、少なくとも一九八〇年代以降のアメリカ(古屋 2009)、一九九〇年代以降のロシア(拙稿 2007)、一九九〇年代のオーストラリア(川上 1999)のベトナム系移民にも共通するものである点も興味深い。

●参考文献

- 川上郁雄 (1999) 「オーストラリアのベトナム仏教寺院の宗教実践」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』一号、風響社、一三四—一五五頁。
- グールー、ピエール (1945 [1936]) 『仏印の村落と農民』上巻、生活社。
- 栗原浩英(2005)『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』東京大学出版会。
- 白石昌也(1993)『ベトナム民族運動と日本・アジア』巖南堂書店。
- 中村義男 (1944) 『ラオスの旅』山根書房。
- 比留間洋一(2007)「モスクワ在住ベトナム人に関する短期フイー

ルド調査の覚書」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』七号、風響社、一三一—一五八頁。

古田元夫 (1991) 『ベトナム共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ』大月書店。

古屋博子 (2009) 『アメリカのベトナム人——祖国との絆とベトナム政府の政策転換』明石書店。

満鉄東亜経済調査局 (1941) 『改訂仏領印度支那篇』。

Evans, Grant (2002) *A Short History of Laos: The Land in Between*. Silkworm Books.

Gunn, Geoffrey C. (1998) *Theravadin, Colonialists and Commissars in Laos*. White Lotus.

Heywood, Denise (2006) *Ancient Luang Prabang*. River Books.

Ivarsson, Soren (2008) *Creating Laos: The Making of a Lao Space between Indochina and Siam, 1860-1945*. Copenhagen: NIAS Press.

Nguyen Ngoc Ha (1990) *Ve Nguoi Viet Nam Dinh Cu O Nuoc Ngoai*. Nha Xuat Ban Thanh Pho Ho Chi Minh.

Tran Dinh Luu (2004) *Viet Kieu Lao-Thai voi Que Huong*. Nha Xuat Ban Chinh Tri Quoc Gia.

Tran Xuan Cau-Kongxayxana (1993) *Tim hieu boi canh lich su xuat hien khai niem "Quan He Dac Biet". Quan He Viet-Lao Lao-Viet*. Nha Xuat Ban Chinh Tri Quoc Gia. pp.288-296.

Van Tao va Furuta Moto (1995) *Nam Doi nam 1945 o Viet Nam: Nhung chung tích lịch sử*. Vien Su Hoc Viet Nam.

(ひるま よういち／静岡県立大学大学院国際関係学研究所)